

## テナントムワン＝クイキニヤーク＝大ワタリガラス？

## ーコリヤク神話研究の再検討(2) Quikinna' qu の説話(I-b)ー

荻原眞子

はじめに

先稿ではW. ヨヘルソンのコリヤクの伝承資料から Tenantom'wan を主体とする説話を取り上げ、“It was at the time when Creator (Tenanto' mwan) lived.”と云う語り口をもつテキストを検討した。本稿では、同じ形式ではあるが、Tenanto' mwan ではなく Quikinna' qu を主体とし、“It was at the time when Big-Raven (Quikinna' qu) lived.”ではじまる説話を対象とする。

ヨヘルソンのテキストにはこのタイプの説話が11話ある。その採録地域は1)タイゴノス半島のトナカイコリヤク：2話(全体45話中)、2)ペンシナ湾西岸の海岸コリヤク：1話(22話中)、4)上ペンシナ湾岸の海岸の海岸コリヤク：5話(43話中)、5)ペンシナ湾東岸の海岸コリヤク：1話(3話中)、6)ベーリング海沿岸：2話(13話中)である。この他にはカムチャダールに1話(9話中)みられる。しかしながら、3)パルパル山脈のキャンプ地で採録された4話のなかにはこのタイプの語り口をもつ説話はみられない。

ヨヘルソンのテキストでは冒頭では常に“Big-Raven (Quikinna' qu)”とあり、本文のなかでは“Big-Raven”となっているが、本稿では、上記の語り口をもつのは Quikinna' qu の説話であるという前提のもとに「クイキニヤーク」とした。

## 1. I-b-1)クイキニヤークの所業についての説話

“It was at the time when Big-Raven (Quikinna' qu) lived.”ではじまる説話では、クイキニヤークを主人公とする話とクイキニヤークでの家族を主人公とする話を大別することができる。そして、後者においてはクイキニヤークの息子エメムクトか娘イネアネウトが登場することが多いが、全体としてはクイキニヤークの家族のエピソードである。まず、クイキニヤークを主人公とする例を挙げる。

## 1) 「&lt;宇宙&gt;は如何にして雨をつくるか」 [No. 9] (抄訳)

クイキニヤークがいたところのことだ。あるとき、雨がしきりに降りつづいた。着る物も納屋の食糧も濡れて、家のなかは水浸しになった。クイキニヤークは息子のエメムクトに「<宇宙>がなにかをやっているに違いない。雨が降ってくるころへ飛んでいって、見てこよう」と言い、彼らはワタリガラスのコートを着て、飛んでいった。

<宇宙>のもとへやってくると、太鼓の音が聞こえ、家のなかでは<宇宙>が太鼓を叩き、そばには妻の雨女がいた。雨をつくるのに<宇宙>は妻の性器を切って太鼓にとりつけ、自分の性器を切って、それをバチに使っていた。太鼓を叩くと、性器から雨が降りそそぐのだった。

クイキニヤークを見つけると、<宇宙>は太鼓を叩くのを止めた。すると、雨が止んだ。そこで、クイキニヤークは息子に「雨が止んだから、行こう」と云って、外へでた。そのとたんに、また<宇宙>は太鼓を打ったので、前のように雨が降りそそいだ。クイキニヤークが家へ入ると、<宇宙>は太鼓を投げ出したので、雨は止んだ。クイキニヤークは息子に「帰ったふりをして、隠れて様子を見

よう」と云い、戸口から出るふりをして、実際にはトナカイの毛に変身して床に横たわった。すると、  
<宇宙>はまたしても太鼓を打ちはじめたので、雨が地上に降りそそいだ。

クイキニャークは息子に、「わたしは彼らを眠らせるから、太鼓とパチをどこへ置か、みていなさい」と云った。<宇宙>と妻は急に眠くなり、太鼓とパチをそばにおいて眠った。クイキニャークが太鼓とパチをとると、太鼓には雨女の性器がついており、パチをみると、それは<宇宙>の性器だった。クイキニャークは太鼓とパチを火のうえで乾かして、元の所において、眠りの呪文を解いた。眠りから覚めると、<宇宙>は太鼓を打ちはじめたが、打てば打つほど天気がよくなり、雲は晴れた。<宇宙>と妻は再び眠った。

クイキニャークと息子は家に帰ってきた。よい天気になったが、狩りはうまく行かず、海獣もトナカイも獲ることができなかった。彼らが飢えるのは<宇宙>が眠っているせいだ。クイキニャークは<宇宙>のところへいって、「今ではよい天気になったのに、飢饉に襲われている。食糧を獲ることができないのだ」と云った。「それは、わたしが子供たちの面倒をみなかったせいだ。これからは獲物が獲れるだろう。おまえたちの面倒をみることにしよう」と<宇宙>は云った。クイキニャークは帰った。それからは、息子たちが狩りにいっては海獣や野生トナカイを獲ってきた。

クイキニャークは地面から犬繋ぎの杭を抜いた。すると、地面の穴からトナカイの群れが出てきた。クイキニャークはたくさんのトナカイを<宇宙>に犠牲に捧げ、それからは狩りもうまくいった [話し手：タイゴノス半島、Chaibuga 川のキャンプ、トナカイコリャクの女性、1901年]。

<宇宙> (Universe) は天空を司り、また、地上の人間世界に食糧となる獲物を下賜する存在であるが、その異常な行為によって雨が降り続くことになる。性器がさまざまに語られるのはコリャクの説話の特徴の一つである。ここで注目すべきことは長雨の原因を探るためにクイキニャークと息子のエメムクトがワタリガラスのコートを着て、天空へ飛翔することである。結論から云えば、1-b) の語り口をもつクイキニャークの説話11話のなかで、ワタリガラスへの変身が語られているのはこの1話だけである。他にはクイキニャークにワタリガラスの相貌はその片鱗すらみることができない。

また、ヨヘルソンはこの説話が「雨や吹雪を中止させるために語られ、好天で語るものとは考えられない」と記している [Jochelson 1908:142]。

病気の原因の一つにカマクがあることは、テナントムワンの説話にも明らかであり、このことはコリャクの説話に共通する観念として認められる。クイキニャーク自身がカマクのために病気になって衰弱したとき、カマクを撃退する手段に野ウサギが使われることは、現実にも習俗としてある。その点からみて、次の説話は神話的である。

## 2) 「エメムクトは如何にしてカマクを殺したか」 [No. 74]

クイキニャークがいたころのことだ。彼が病気になった。息子のエメムクトが借り狩りから戻ってきて、家のそばまでくると父の大きな呻き声が聞こえてきた。エメムクトは少しの間家において、再び野にでかけた。途中で地下式の家があった。エメムクトは用心して近づき、中をのぞくとカマクの女が子供といた。カマクは留守だった。ちょうどそのときエメムクトはカマク女が「あの人は狩りに

はいくけれど、食べ物を持ってこれられない。はじめて奴を襲ってから大分たつのに、やっつけられないから、息子は食べるものがない」と云っているのを聞いた。

突如としてカマクが炉の火のなかから出てきた。カマク女は大きな声で「また、空手だ。毎日あそこへ行っていて、それに『奴の耳を突けば死ぬ』と教えているのに、まだ殺せないとは」と云った。カマクは「奴を殺すのは容易じゃない。奴も女房もシャマンなのだ。わたしがどこから近づこうとしても見ているのだ」と応えた。カマク女は「明日の朝早く行って、日の出前に殺しておしまい、いつもいつも空手でかえってくるから、息子はおなかを空かせ、飢え死にするかもしれない」といった。エメムクトはそれを聞くと、「すると、親父は明日の朝、死ぬかもしれない」と思った。

エメムクトはカマクの家を離れ、父親の差し迫った死のことにすっかり心を奪われて荒野を歩いていた。ふと気がつくやうに険しい丘のふもとに一人の老婆が座っていた。彼女は「おまえさん、何をそんなに悲しんでいるのか」と云った。「悲しいのは、父が明日殺されて食われてしまうからです。カマクがそういっているのを聞いたのです」「父さんはどこが悪いのですか」「身体中が痛むのです。すっかり痩せてしまって骨ばかりです」「おまえさんの父母は二人ともシャマンなのに、カマクをやっつけられないとは」と老婆は云った。そして、野ウサギの頭を引っぱり出すと、それをエメムクトに与えて、「これをカマクの家へ持って行って、投げ込みなさい。もし、何事もおこらなかつたら、ここへ戻ってきなさい」と云った。

エメムクトはその野ウサギの頭をもってカマクのところへいき、家の中を見た。カマクたちは炉のそばにいて話をしていた。カマクの女は「あしたは何が何でも奴を殺しなさい」と云っている。それを聞くと、エメムクトは野ウサギの頭を家のなかへ投げ入れた。カマクと妻は小さな息子を抱えて火のなかに消えてしまった。エメムクトは家のなかへ降りると、野ウサギの頭を炉の上において、出ていった。

「どっちにしろ、父さんは死んでしまう」とエメムクトは道々思った。家のずっと遠くから父親の大きな呻き声が聞こえてきたが、家に近づくとそれが止んだ。「父さんは死んだのだ」と思ったが、家の屋根に上って、中をのぞくと、父親は火のそばに座って、母親に「すっかり良くなった」と云っているのが聞こえてきた。ところが、ミチは「これは死ぬまえに起こる一時の小康です」と応えた。それを聞くや否や、エメムクトは家のなかに飛び降りて、父親に「わたしはカマクをみんなやっつけてきた。これであなたは直ります」と云った。「本当におまえがカマクをみんな殺したのなら、おまえの云うとおり、わたしはもう病気にはならない」クイキニャークは全快して、これまでのように暮らした【語り手：カーメンスコエ村、コリャクの女性、1900年11月】。

病気はカマクに襲われ、取り憑かれることによって起こる。カマクは人喰いである。そして、それは炉の火を通じて出沒すると云うのも、コリャクの説話では共通して語られる。ここではクイキニャークとその妻のミチがシャマンであるにもかかわらず、病気の原因であるカマクを防ぐことができないと云うことが、話の展開をもたらしている。そして、父親を心配する息子エメムクトの心情が見事に表わされている。

## 2. I-b-2) 家長としてのクイキニヤーク - 家族のエピソード

I-b) の語り口をもつクイキニヤークの説話では、その家族のさまざまなエピソードが語られ、クイキニヤークは肝心な場面で家長としての存在を顕示しているような話が多い。しかも、概して、この類の説話は構成も単純ではなく、長い上、しばしば、婚姻が主要なモチーフとなっているといえよう。

### 3) 「エメムクトとシロクジラ女」 [No. 110]

クイキニヤークがいたころのこと。アミツルと云う小さなクモの妹がいた。獣の主ピチブチンがかの女と結婚したがった。そのころクイキニヤークはひどい病気になり、起きあがることができず、こういった。「ピチブチン、おまえはこれから義理の兄弟になるが、何とかして、わたしの病気の原因をみつけておくれ」ピチブチンは太鼓を打って、病気を見つけるとクイキニヤークに「犬ぞりで明日海辺にいきなさい」といった。翌朝、クイキニヤークが犬ぞりで出かけたが、しばらくすると櫓のうえに座ることができ、立つことも、走ることもできるようになって、犬を操った。川口には氷に穴があり、そこにシロクジラ女がいた。名をミチといい、彼は妻にして連れ帰った。しばらくすると、ミチはエメムクトを産んだ。彼はまもなく大人になって、やはりシロクジラ女を妻にした。それからエメムクトは散歩にいった、そこで萎れ草女にあつて結婚し、その後には火女、それからキンチェサチナウトを妻にした。

4人の女たちはけんかをせずによいしよにいらしていたが、あるときエメムクトが暁女をつれてくると、かの女はみんなとけんかを始めた。シロクジラ女が「わたしは彼の最初の妻で、一番年上です。わたしは出ていく」と云うと、クイキニヤークの家族たちはかの女が出て行かぬよう寝ずの番をした。とうとうクイキニヤークのまぶたがおりて、「わたしは寝たい」と云った。

そこで、シロクジラ女は逃げ出した。湖までくると、女の心臓はアザラシに呑みこまれて、女は男に変身し、ベニテングダケびとの女と結婚した。エメムクトはシロクジラ女を捜して歩いたが、その途中、小川で水を飲もうとすると、下から煙りの臭いがした。下をみると、水底には家があり、そこにお婆のアミツルと召使いのキヒツルがいた。水を飲んでいるときに、エメムクトの涙が落ちて、それがまっすぐお婆の家に滴ってお婆たちを濡らした。

「おや、雨だ」といって二人が見上げると、男が水を飲んでいるので、「お客だ」といった。そこでキヒツルは「目をつむっておいてきなさい」といい、エメムクトがそうすると、はしごが見えたので、それを伝ておいた。「食べるものをあげなさい」とアミツルが云うと、召使いは隅の床からちっぽけなヒメハヤの裂いて干したのをつまみ上げた。アミツルは松かさの一片と指の爪ほどの魚の浮き袋をもって来た。浮き袋から松かさの油を注ぎ、干し魚とよいしよにエメムクトの前においた。「目を閉じて、食べはじめなさい」と云うが、エメムクトは「これでは足りない」と思いながら、云われたとおりに、油のなかにはじめは手をいれ、それから腕の肘までつつこんだ。目を開けてみると、大きなキングサモンと油の容器があつた。彼は魚に油に浸して食べた。

それからお婆が「おまえの妻は湖にいる。心臓をアザラシの呑みこまれ、男に変身してベニテングダケびとの女と結婚しようとしている」と話した。エメムクトは湖へいき、アザラシを殺し、妻の心

臓を取り戻し、ベニテングダケびとの家へはいった。そこには老婆がいた。エメムクトは心臓をテーブルの上に置いて、自分は隠れた。男の姿になった妻が森から帰ってきて、「腹がすいた」と云うと、老婆が「そこにアザラシの心臓がある。食べなさい」といった。妻は心臓をたべると、すぐさま夫を思いだした。エメムクトは隠れていたところから出てきて、二人はいっしょに帰り、暮らした。おしまい [パラン村で採録]。

この話ではクイキニャークにクモ女の妹がおり、また、妻はシロクジラ女、息子はエメムクトで、成人するとシロクジラ女、萎れ草女、火女、キンチェサチナウト(?)、さらには暁女と結婚することになっている。そして、出奔したクジラ女の妻を捜しにいて、水底の世界に招じ入れられ、水界における豊饒さを目の当たりにする。また、シロクジラ女の妻がアザラシに心臓を取られて、男に変身し、ベニテングダケの女を結婚するという話にはいろいろ不可解な点がある。ただ、この説話には、必ずしも明確ではないが、自然界、特に水界の説明として興味深いものがある。

#### 4) 「カイツブリ男」 [No. 80]

クイキニャークがいたところのことだ。長い間、クイキニャークは舟ででかけることができなかつた。舟に乗って海へでると激しい嵐になって引き返さなければならなかつたからだ。そんなことが数回あつた。クイキニャークは海をなだめることができなかつた。息子に「エメムクト、シャマンにたのんで、わたしたちがでかけようとするといつでも海が荒れるわけをはっきりさせよう。カイツブリ男をここへつれてきてくれ。彼ならきっと分かるだろう」と云つた。

エメムクトは行って、カイツブリ男の家につくと、こう云つた。「わたしたちのところへきてくださるようお願いにきました。わたしたちが海へ出ようとする、海が吹き荒れるのです。あなたはその原因を見つけてください」二人はクイキニャークの家へ行った。カイツブリ男は太鼓を受け取ると、儀式をはじめた。しばらくすると、彼は太鼓を打つのを止めて、云つた。「海の中ほどに女がいて嵐を解き放っている。もし、エメムクトがその女と結婚すれば、かの女はそれを止めるだろう」

翌日、その女をみつけに海へ出ていった。ある島に上がると、そこに女がいた。かの女をつれてきて、エメムクトは結婚をした。それから間もなく、彼らはクジラ捕りに出かけた。天気がよく、クジラが獲れた。エメムクトの妹のチャナイナウトといふこのキルはクジラ祭りのためにスゲ草を採りに出かけた。キルはいとこに「あなたは、カイツブリ男のシャマンの歌を真似できる?」と云つた。チャナイナウトは応えて、「カイツブリたちはこの草のなかを歩き回っているから、カイツブリ男が真似されているのを聞くかもしれない」と云つた。キルは棒をとって草をたたきながら、「ハット、ハット、ハット」と叫んでカイツブリを追い出した。が、何もうごかぬかつたので、すぐにそれを止めた。そして、いとこに云つた。「草のなかにはだれもいない。彼の歌を歌ってみて」チャナイナウトはちょうどカイツブリ男がやったように歌つた。ところが、とつぜん、当人が草のなかからあらわれ、大声で「なぜおれの呪文をふざけて歌うのだ」と怒鳴つた。キルはあまりにもびっくりしたので、「ペニスがぶら下がっている、バルバがぶら下がっている」と叫び、二人の女の子は動転し、集めた

草をもって逃げた。家に帰ると、クジラ祭りの準備をした。

クイキニヤークはエメムクトに「行ってカイツブリ男を呼んで来なさい」と云った。そこへ行くと、エメムクトは「呼びにきました。クジラ送りの祭りをします」と云った。カイツブリ男は「わたしは行かない」と応えた。エメムクトは家は帰ってくるとカイツブリ男の返事を伝えた。クイキニヤークはもう一度エメムクトを使いに行った。「父があなたを招いています」と云うと、カイツブリ男は「よかろう、行こう」と云った。二人が着くと、祭りがはじまり、クジラは送られ、人々は用意された食べ物を食べた。祭りが終わってカイツブリ男は帰るとき、通りすがりにチャナイナウトの心臓を奪った。カイツブリ男が行ってしまうと、チャナイナウトは死んだ。

またしてもエメムクトが呼びにいかされた。彼は「チャナイナウトが死にました。来て、生き返らせてください」二人はクイキニヤークの家へ行き、カイツブリ男は太鼓を打って、シャマンの歌を歌った。それからチャナイナウトの元のところに心臓を入れたので、かの女は生き返った。カイツブリ男はかの女と結婚して、自分の家に連れ帰った。おなじときに、クイキニヤークは上の娘を霧男と結婚させた。最後にはみんなクイキニヤークの家に戻ってきて、いっしょに暮らし、クジラ漁もうまくいった。おしまい [語り手：カーメンスコエ村、海岸コリヤクの女性、1900年12月]。

海上の嵐は沖を領する女がエメムクトを求めている意思表示であり、その嵐のせいでクイキニヤークの家族はクジラ捕りができないのである。それを明らかにしたのはカイツブリ男のシャマンである。シャマンの歌を真似ることはシャマンの聖性に触れるようで、娘は死によってそれを購うことになる。このことも、現実の社会的規範に則しているものと思われる。さらに、カイツブリ男のシャマンの突然の出現に驚愕した娘はあられもないことを口走るが、これはアイヌのイムと同じ性格の反応と云えよう。そして、この説話でも一家の家長としてクイキニヤークには存在感が感じられる。

結婚のモチーフはもっとも頻繁に語られ、そのことからコリヤクの説話そのものが一体何を伝えようとしているのかを知る一つの手がかりが得られそうに思われる。見初めた女性の父親のもとで働くことが求婚となる労役婚は伝承のなかでは極めて普通のことである。これと対照的であるが、次はエメムクトを受け入れようしない娘を強引に連れ去ってくるといういささか乱暴な話である。

##### 5) 「エメムクットと草女」 [No. 5]

クイキニヤークがいたころのことだ。息子のエメムクットは自分のカンジキを作り、出来上がるのと「試してくる」と云って出かけ、川上の方へいった。偶然に二つの家を見つけた。年取った根男が斧で樫の滑り木を削っていたが、エメムクットを見ると、「やあ、客がきた。家へ入ろう」と云った。老人は先にいって、娘たちに「顔を洗いなさい。そんなに汚いと、客に笑われるぞ」と云うと、少女たちはすぐに顔を洗いに行った。その間にエメムクットは家に入った。根男の妻は1人の娘の草女に「干し魚をとっておいで」と云った。彼女を一目見るなり、エメムクットは好きになり、言い寄った。そして、彼女のために根男のもとで働いた。父親は良かろうと思っていたが、娘はいやがり、エメムクットがつかまえようとする、いつも逃げた。

家ではエメムクットの父が「どこへいったのだろう。ちょっと出かけたはずなのに、戻ってこないな」と思っていた。エメムクットは相変わらず、根男のもとで仕えていたが、彼女を得ることはできなかった。一時戻ってきて、父親に「草女のために根男の家で働いているのに、彼女を得ることができない」と云うと、クイキニャークは「花嫁を迎えに誰を遣ったらいだろう」と云った。キルが「わたしがいこう。わたしにクマの毛皮を着せてください」と云い出した。そこでの魚の膠をつくり、キルの着物を脱がせ、その身体にクマの毛皮を貼り付け、尾のところにはアザラシの胃に血を入れてくっつけた。

彼女は出かけると、根男の地下式の家の屋根に上り、はしごを松葉杖でノックするとそれは二つに折れた。彼女は家の中に向かって、「どこにいるのだ？」と大声で云った。根男は「ここだ。入ってきなさい」と云うので、キルは入り、「草女はどこだ。エメムクットと結婚したがるのは、わたしに来て欲しかったからだ」と云って、杖で尿壺を打ち壊した。そして、「草女をよこさないとおまえさんたちの頭をこんな風に打ち壊すぞ」と云った。アザラシの胃がゆるんで、血が流れだした。「尻尾から流れだしたのは何だ？」「早く、早く、血が流れているのは、わたしが強く草女を連れていきたいと思うからだ。早くよこしなさい。そうすればわたしは帰る」草女は差し出され、キルは彼女を連れて帰った。草女はいやがらなくなったので、エメムクットは彼女と結婚した。

家人はクマの毛皮を脱がせようとして、ナイフで切り取ったが、キルの肉や性器もいっしょに切り取ってしまったので、彼女は痛くて泣いた。そこで、クイキニャークは妹のヘッル、キルの母親に「治してやれ」と云い、彼女は娘の身体に呪文をかけて傷を治したが、なくなった性器はもう戻らなかった。キルがエメムクットに「あんたは嫁さんと楽しんでいるのに、わたしにはあれがなくなってしまった」と云うと、彼は「なくてもなんとかなるさ。少なくとも、痛みはなくなったじゃないか」と云った。

あるとき、エメムクットは妻に「両親のところへいこう。あなたを連れ去ったのがクマびとだと思われているに違いない」と云い、出かけた。根男のところへいくと、彼は「クマ男はどこだ」と訊いた。エメムクットはこの次第を話し、春まで義夫のもとで過ごしてから帰った。キルは相変わらず vulva がないままだった。[語り手：Avekova 川のキャンプ、トナカイコリャクの女性、1901年6月]

滑稽味を帯びた話であるが、クイキニャークの家族の説話はモチーフは多様ではあるものの、家族関係にはコリャクの家族に対する理想が投影されていると云ってよからう。キルの受難に対して、母親の呪文による治療は実際に痛みを癒す手法であったと思われる。

次の説話は少々長く、また、部分的に英雄説話的な特徴が見られる。

#### 6) 「イネアネウトと雲男」 [No. 114]

① クイキニャークがいたころのことだ。クイキニャークには娘のイネアネウトがいた。毎日夕方のきまった時間に、イネアネウトはかんじきをつけて荒野へ出ていき、日の出に家へもどってきた。ある日クイキニャークの長男のエメムクットが父親に「どうして娘を止めないのですか。女の子がかん

じきをはいて一晩中荒野を走り回ってはいけない」と云った。クイキニャークは「あの子が兄のおまえの云うことを聞かないなら、わたしの云うことなんかだめだろう」と応えた。

それからまもなく、妬みやがクイキニャークの家へやってきて、エメムクトに「どうして妹を止めないのだ。あの子は毎夜荒野のなかを駆け回っている。星男と月男がいつもわたしに聞くのだ。『あの子は夜に誰を探しているのかね』と」

② エメムクトはまたしても父親のところへいき、人がイネアネウトのことをどう知っているかを告げた。すると、クイキニャークは家の外で斧を研ぐと、戻ってきて、そっとイネアネウトのところへ上がっていき、その右足を切った。それから、その足をスゲ草に包んで、外の納屋のてっぺんに置いた。もう一度、そこへ上がったとき、足は突如として空へ上って行った。

③ イネアネウトは呻いたりため息をついたりしたので、家人は誰も眠ることができなかった。翌日、クイキニャークは家人に「イネアネウトにはうんざりだ。あの子を置いて、夏の家へ移ることにしよう」と云って、家族はみな冬のキャンプから夏の家へ移っていった。イネアネウトには何も食糧を残しておかなかったの、彼女は春になるまで冬中ひもじかった。

④ 暖かくなると、チドリが家のそばを渡っていくのが見えた。イネアネウトは膝でいざりながら外へでると、輪なわをつくって、それを納屋の上において、自分は家に隠れていた。しばらくして、もう一度出てみると、一羽のチドリがかかっていた。イネアネウトはその片脚を切り取り、自分にくっつけてみると、歩けた。家の柱の陰に土の壺があったので、それでチドリを料理して食べた。少し力がついたように感じたので、自分の脚を探しにやっとのことで外へ出たとき、チドリの脚は身体の重みで折れてしまった。それでまた家へ這って入らなければならなかった。

⑤ しばらくして、屋根の出入り口から見ているとガンが飛んでいた。そこでまた這って外へいき、納屋の上に輪なわをしかけ、自分は家のなかに隠れていた。翌朝出てみると、一羽のガンがかかっていた。イネアネウトはその片足を切って、自分の身体に当ててみると、歩けるようになった。そこでガンを家のなかに持ち込んで、土の壺でゆでて食べ、自分の脚を探しに出た。そうして、家の周りや納屋のあたりをさんざん歩き回ったが、脚はどこにもなかった。ふと見上げると、自分の家が消えて、荒野のなかにいた。

⑥ 少し歩くと、一軒の家があった。近づくと、人が出てきて、イネアネウトを招き入れた。それはイナヒテラエン\*の家だった。家のなかに入ると、イネアネウトはその老人に話した。「わたしは兄や父の云うことを聞かなかったの、父はわたしの片足を切ってしまった。あちらこちら脚をさがして歩いたのですが、ありませんでした」すると、老人はこう云った。「兄や父親の云うことを聞かなかったのはおまえのせいではない。わたしの息子の雲男が夜に荒野を徘徊するようにし向けたのだ。親父さんに片足を切らせたのも、おまえをここまで探しに来させたのも息子だ。親父さんが片足を外へ置いたときに、それはここまで飛んできた。あそこにはぶら下がっている。これで雲男はおまえさんと結婚するだろう」そこで、老人は脚を下ろして、イネアネウトについているガンの脚と取り替えたので、彼女はすっかりよくなった。

⑦ しばらくすると、老人が「行って地上を見てごらん」と云った。イネアネウトが出て、下を見



下ろすと、海岸びとの村やトナカイびとのキャンプが全部見えた。クイキニャークの村も見えたが、父親の仕打ちを思いだすと怒りが込み上げてきた。そこで、鳥をぜんぶ、海や陸の獣をぜんぶ、トナカイの群をぜんぶ、海や川の魚をぜんぶ取り上げて、アザランの皮に包んだ。それから、ベリー、木の根、食用植物をとって別のアザラン皮に包んだ。⑩

⑧ 翌朝、クイキニャークが狩りに出ると、生き物はみなこの世から消え去っていた。地上には四つ足はいなくなり、海にはアザランもクジラもいなくなり、川には魚がおらず、空には鳥がいなかった。クイキニャークは腹が空いて家に帰ると、ミチにベリーを摘んでくるように云った。ミチが行ってみると、どこにもベリーや木の根はなかった。ミチは「わたしたちは何を食べればいいのか。ベリーさえないのに、クイキニャークは冬の家に置き去りにしてきた娘を訪ねさせてくれない」と云いながら、泣いた。ふと地面をみると、そこには甘い草の小さな若芽があった。その根を掘りだして家へ帰った。ミチはその根をこどもたちに食べさせたが、クイキニャークには何も与えなかった。「自分でいって根を掘ってこよう」と云って、掘り棒を手に野草を採りに行った。⑩⑪⑫

⑧ イナヒテラエンの妻が地上をみて、イネアネウトに告げた。「ごらん、あなたの父さんが自分で根を掘りに行きましたよ。これできっと気が済んだでしょう。何か食べ物をあげなさい」イネアネウトは何も云わず、クマの毛皮に草を包み、それを地上に投げ下ろした。地上につくと、それは本物のクマになり、クイキニャークに向かって走り、追いかけた。クイキニャークは家へ逃げ帰り、家へ入ると息子たちに云った。「野にはトナカイや獣がいなくていいと云っていたが、今、クマがこの家まで追ってきた」エメムクトはすぐに飛び出して、クマを殺した。皮を剥ぐと、なかには草しかなかった。クイキニャークは草をみると、「きっと、イネアネウトは生きていないに違いない。なにかもあの子のしていることだ」と云った。

⑨ イナヒテラエンはクイキニャークを憐れみ、イネアネウトに「もう、食糧を隠すのは止めなさい。みんな飢え死にになってしまうぞ、わかっているだろうが」と云った。それで、イネアネウトはアザラン皮を広げた。すると動物や植物が再び水のなか、森のなか、ツンドラに現れた。翌朝、クイキニャークが起きてみると鳥が飛び回っていたので、狩りに出かけ、クジラをしとめてきた。

⑩ まもなく、秋になった。ある日、クイキニャークの家族が外へでると、空からトナカイに乗った人びとが長い列をなして降りてきた。それは雲男がイネアネウトを両親のところへ連れ帰ってきたのだ。家のなかに案内されると、イネアネウトは家族に「自分の脚がすぐに空の雲男のところへ上っていったこと、自分がどうやってそこへ行ったか」を語った。そこで、クイキニャークは「イナヒテラエンがわたしに大事な娘の脚を切らせたのか」と云った。

雲男とイネアネウトはしばらくクイキニャークと過ごし、それから空へ帰った。エメムクトはいっしょに行き、そこでイナヒテラエンの娘、雲女と結婚した。そして、かの女をクイキニャークの村へ連れて帰り、そこで暮らした [語り手：Talovka 村、海岸コリャクの女性、1900年12月]。

イナヒテラエン\* = ヨヘルソンの訳語は Supervisor。雲びとの親であるが、具体的には不明。

これは大変長い説話であるが、構成要素を拾うと、娘の夜の徘徊とそれに対する非難、片足切断、娘の遺棄すな

わち夏キャンプへの移動、渡り鳥、鳥の脚の接着、雲人の意図、イネアネウトのクイキニャークへの怒りと報復すなわち獲物の奪取、家族の飢餓と窮乏、宥和、不本意な行動の解明、結婚と里帰りということになる。

肝要なモチーフは説話の登場者が自分の意志ではなく、未知の見えない力によって支配されるという観念である。上空にある雲から地上世界は見通すことができ、そこにある存在によって地上の存在は操られ、不本意な行動にでる。もう一つは、雲男との結婚のモチーフであり、これもまた、コリャクの説話にはしばしばみられる。次もその一例である。

#### 7) 「雲男とキル」 [No. 83]

① クイキニャークがいたころのことだ。クイキニャークには息子のエメムクトがいた。その妻はキルといった。あるときキルはベリー摘みに行った。突如として一人の男が雲からおりてくるのがみえた。男が地面に着くと、キルはそっと近づいてその男のナイフを取った。男の名は雲男だった。キルはナイフを家へ持って帰り、隠し、そのことについては夫に何も話さなかった。あるとき、エメムクトは女たちに、「新しいきれいな服をつくってくれ。雲へ上がって行って、あそこの村で競技や格闘をしてくる」と云った。女たちは毛皮を縫って服をつくりはじめた。キルとミチは外で縫い物をした。そのあとエメムクトが妻に「砥石を取ってきておくれ、ナイフを研ぎたいのだ」といった。母親のミチは「おまえはどうして自分で行かないのか。私わたしたちは早く縫わなきゃならない」と云った。エメムクトは自分で行った。

砥石を探している間にエメムクトは妻が盗んできたナイフを見つけ、それを持ってきて、妻にこう云った。「どこでこのナイフを手に入れたのだ。きっと、もう一人夫がいるのだろう」そして、妻を殴って殺してしまい、その身体を投げ捨てた。そのあと、みなは家のなかに入った。

② 雲男は雲からキルが死んで横たわっているのを見ると、降りてきて、生き返らせ、連れて上り、妻にした。エメムクトの母は服を縫いおわり、エメムクトは雲へ上った。そこへ着いて、雲男の家にはいると、思いがけずキルがいるので、雲男に「どうやってキルを連れてきたのか。わたしはかの女を殺したのではなかったか」と云った。雲男は、「わたしはわざとかの女がナイフを盗み、あなたがかの女を殺すようにし向けた。そうして、かの女を蘇らせて、つれてきたのだ」と答えた。

③ キルの父親の大寒、母親のハナと兄弟のイッラは雲男の家へ上がった。今や雲の村で競技がはじまった。エメムクトと村人はボールを蹴ったが、誰もエメムクトにはかなわなかった。それから、相撲をとったが、エメムクトはみんなを負かした。雲男はエメムクトに妹の雲女を嫁として与えた。

④ その間に下では、クイキニャークが外へでて犬のえさをもって空にいるキルの家族たちをまるで犬を呼ぶように呼んだ。彼らは地上に落ちてきて、犬のように餌桶から食べた。キルもいっしょに落ちてきた。こうして彼らはクイキニャークのもとで使用人として暮らすことになった。

⑤ あるとき、クイキニャークが外へでて、あたりを見回すと、大きなビーズが雪といっしょに落ちてきた。クイキニャークは家族たちに「どうやら雲からお客がくるようだ。以前にも同じことがあって、雲びとが訪ねてくるときにはビーズが雪といっしょに降ってくるのだ」と云った。間もなく、エメムクトと妻が雲びとに伴われて降りてきた。エメムクトのトナカイには鉄の角と鉄の蹄がついてお

り、走ると雷のような音がした。雲びとは後に従い、そのなかに雲男がいて、地上に降りてきた。エメムクトは妹のイネアネウトを雲男と結婚させた。こうして、雲の住人たちはエメムクトの家族と身内となり、夏中クイキニャークといっしょに過ごした。

⑥ 夏のはじめにクイキニャークは家族の助けをかりて皮舟を水に下ろした。舟下しの祭りが終わってから、クジラ捕りにでかけ、一頭をしとめた。エメムクト、雲男と他の人たちがクジラを浜に引きあげた。そのときキルが家から出てきて出入り口から「帰ってきたわ、クジラを引き揚げるにちがいないわ」と大声で云ったが、ミチは信じようとせず、「キル、うそを云っているのでしょうか」と云った。そして下の娘のチャナイナウトを確かめにやった。かの女は出て見て、「本当よ、クジラを引き揚げています」と家のなかに向かってさげんだ。クジラをとった皮舟は浜に近づいてきた。

⑦ そこでミチ、ハナ、イネアネウト、チャナイナウトとキルは刺繍のある踊りの服をきて、燃えさしをもってクジラを迎えに出た。かの女たちは浜辺で歌って踊った。人びとはクジラを引き揚げて、解体しはじめ、切った肉や脂身を納屋に運び入れた。翌日、家のなかにスゲ草でクジラのための小屋をこしらえ、クジラの胸膜や肝臓膜を張って太鼓をつくった。それからその太鼓を叩いて歌った。

⑧ クジラ迎えの祭りがおわると、肉と脂身と皮を分けた。それから、エメムクトが「クジラ送りの祭りをするのに、川上へ行こう、女たちはベリーや草の根を集めるがいい」といった。彼らは皮舟で川をさかのぼり、ベリーのたくさんあるところに降りると、女たちはベリーを摘み、根を掘り、ヤナギランを集め、アザラシの皮袋にいれた。エメムクトが女たちに「急ぎなさい。帰ろう」と云うと、女たちは集めるのを止めて、皮舟に乗り家へ向かった。着くと、荷を下ろして納屋に運び入れたので、納屋は天井までいっぱいになった。クイキニャークは男たちに、「プディングをつくる桶を用意なさい」といったので、彼らはそうした。それから女たちがヤナギラン、草の根とベリーをもってくると、何人かがそれを脂身といっしょにつき砕き、他の人は太鼓を叩いてシャマンの歌を歌った。それからプディングをつくった。それがすむと、クジラを家へ送り帰す祭りの踊りがはじまった。踊りがおわると、寝にいった。翌朝、起きて踊りをまたはじめた。イネアネウトは絹の刺繍とカワウソの毛を縁取った踊りの服を着ていた。エメムクトは一枚のラッコの毛皮をそっくり縁取りにした踊りの服を着ていた。二人は上手い踊り手だった。と云うのはクジラを捕り、ちよくちよくクジラ祭りを祝っていたからだ。

⑨ さて、クジラ送りの祭りがおわり、クジラは海へ帰っていった。それからクジラの皮、脂身、肉とプディングを食べ、それを近くの村からやってきた人たちにも分けたので、だれでも分け前に与った。

3日後に、また客を招き、クジラの旅食として用意された袋のプディングをもってきて、また食べた。この儀式がおわると、トナカイコリャクがやってきたので、その人たちにもクジラの皮と脂身が与えられた。川上に住む根男もやってきて、ご馳走をもらった。

⑩ やがて雲男が雲のなかの家へ帰ることになった。クイキニャークは一つの橇を牽くために必要なトナカイ、脂身とクジラの皮を贈った。雲からの客はみな去り、エメムクトと妻はとどまった。

こうして、それから後、あるものは雲の上で、他のものは地上で暮らし、そして、しばしば互いに

訪ねあった〔語り手：カーメンスコエ村、海岸コリヤクの少女、1900年11月〕。

これもまた、前半はクイキニヤークの家族の話であり、息子エメムクトの嫁キルが天空の雲男に誘惑される話である。と同時にエメムクトが雲びとのもとへ新しい衣服をきて遠征し、ボール蹴りや相撲などのゲームに勝って雲びとの嫁を獲得するというのは、典型的な英雄の花嫁獲得の手法であると云えよう。天空から嫁を伴って帰還する際に、雲びとが同道し、それが鉄の枝角と蹄をもったトナカイを引き連れてくるというのは、海岸コリヤクとトナカイコリヤクとの婚姻関係を背景としているとも読みとれようが、英雄叙事詩では鉄のモチーフが無視できない比重をしめていることを合わせて考えることもできる。後半はクジラ送りについての手順が詳細に語られ、しかも、それを取り仕切っているのはクイキニヤークであり、言うなれば、家長もしくは族長としての役割が明白である。このことからクジラ送りの祭りについて、説話が実際的な意味合いをもっているといってもよからう。

8) 「クイキニヤークの天空旅行」 [No. 95]

① クイキニヤークがいたところのこと。あるとき、彼は妻と息子や娘たちに「空へ移動しよう、だが、途中で決して振り返ってはいけない」といった。みなは旅支度をして、トナカイ櫓をつなげ、空へ上っていった。エメムクトは一番後の櫓にのっていた。彼はまだとても小さかった。空の半分まで上ったときに、エメムクトは父親の命令にもかかわらず、振り返った。すると、前の櫓に結んであった革ひもが切れて、エメムクトは下へ落ちた。「落ちるよ」と云う声に、その前の櫓にいたミチは先頭の櫓のクイキニヤークに「エメムクトが落ちた」と告げた。クイキニヤークは振り返らずに、「後につないである2頭のトナカイの綱を切れ。1頭はわたしので、もう1頭はあなたのだ。エメムクトの道連れにしよう」と云った。

② エメムクトと2頭のトナカイはクイキニヤークの家のそばの地面に落下した。地面に着くやトナカイは人間になり、一人は男、他は女になった。男はトナカイ・クイキニヤーク、女はトナカイ・ミチといった。彼らはエメムクトをわが子のように育てた。

③ エメムクトが大人になったとき、両親は「息子に嫁をとらせましょう。根男の姉妹の娘をもらいましょう」と云って、出かけた。根男の家へいくと、「息子の嫁をもらいにきた」と云った。すると、根男は「姪はまだ幼い。姉と相談をするまで待っていてくれ」と答えた。そのとき、突如として誰かが「また、お年寄りの男と女がやってきた」と大きな声でいった。その人たちが家へはいってくると、根男は「どなたですか」と尋ねた。彼らは「わたしたちは霜の親です。息子の霜に嫁をもらいにきた」と答えた。

④ 根男の妹の根女は「娘の野生ライ女をクイキニヤークの息子にはやりません」といったので、彼女は霧と結婚することになり、その親たちはかの女を家へ連れて帰った。

それから、根男は妻の川女に「うちの娘の草女をクイキニヤークの息子の嫁にしよう。気の毒な年寄りがここまで来たのだから」といって、娘に旅支度をした。かの女は着物と臍糸をもらったが、トナカイはなかった。根男は数頭のトナカイしかもっていなかったのだ。年寄りの夫婦は娘をつれて歩いて帰り、エメムクトと結婚させた。

⑤ クイキニヤークは家族と空でかなり長い間暮らした。そこでは娘のイネアネウトを雲男と、息子の大明かりを雲男の妹の雲女と結婚させた。クイキニヤークもミチも二人とも息子のエメムクトのことはすっかり忘れていた。あるとき、クイキニヤークは家族に「家へ帰ろう。大地へ降りよう」といい、彼らは鉄の枝角のあるトナカイの群を引き連れて空を後にした。雲男が一緒だった。

そのときエメムクトは薪集めに外へ出ていた。そしてクイキニヤークのトナカイをみた。ミチはクイキニヤークに「あの汚らしい、ぼろをまとった男は誰」と聞いたので、クイキニヤークは「おまえは誰だ」と尋ねると、「エメムクトだ」と答えた。クイキニヤークは「父親は誰だ」とつづけると、「わたしの父はクイキニヤークだ」「で、母親は誰だ」「母はミチだ」「で親たちはどこにいる」「家にいる」「トナカイはあるのか」「トナカイはないので、歩くのだ。そこでクイキニヤークにはすべてのことが思いだされた。「そうだ、これはわたしたちの息子のエメムクトだ。空へ上っていくときにこの子の綱を切って、二頭のトナカイを切り離して、いっしょに下ろしたのだ。トナカイは人間になって、エメムクトを育てたのだ」。それから、クイキニヤークがエメムクトを打つと、エメムクトは二つに割れて、本当の、美しい、身なりのいいエメムクトが現れた。

⑥ クイキニヤークは家へつくと、年寄りたちはそわそわしはじめ、義理の娘に「外の騒ぎが何だか、見てきておくれ」といった。娘は外へ出て、戻ってくると「誰かトナカイの大きな群をつれてきた。騒がしい音はその鉄の枝角の雷鳴です」と伝えた。草女が見ていると、年寄りたちの頭はトナカイの頭に変わり足は蹄になった。「どうしてこんな風になるのですか」「わたしたちを見ないで、上をごらん」

外ではクイキニヤークがエメムクトに「もっていたトナカイを連れておいで。至高神に犠牲として捧げよう」といった。エメムクトが地下式の家の屋根に上って、出入り口から「妻よ、どこにいるのか」と大声で云うと、野生ライ女は「わたしはあなたの妻ではない。義理の父さんと母さんはトナカイになってしまって、私の夫がどこにいるのか分からない」と云った。かの女はエメムクトがさっぱりして美男子だったので分からなかったのだ。エメムクトは「わたしがエメムクトだ、おまえの夫だ。父と母がやってきたのだ、だから、トナカイを連れておいで。殺して至高神へ供儀するのだ」と云った。野生ライ女はトナカイをつれて出てきた。クイキニヤークはそれを犠牲にし、ふたたび以前の家でくらしした。

⑦ クイキニヤークがもどってきて間もなく、根女は川女に「娘たちの様子をみにいきましょう」といって出かけた。途中で根女は川女をからかって「わたしはトナカイに乗って、エヘイ、エヘイと帰ってくる。あなたは歩いてフチ、フチ、よたよた帰ってくることになるでしょう」といった。まもなく、女たちはクイキニヤークのトナカイがいる草地についた。見ると、トナカイには鉄の枝角がついていた。根女は川女に「誰か空から降りてきたようだ」と云った。それから牧童が見えたので、「あなたたちは誰ですか。このトナカイは誰のですか」と尋ねた。トナカイの見張りをしていた大明かりが「これはうちのトナカイです、クイキニヤークのです」といった。「霜男の家はどこですか」と驚いた根女が尋ねると、「ずっと遠くです」と云う。根女は川女に「先へ行くわ」と云った。

⑧ 根女が霜男の家へきてみると、彼が表にいたので、「娘はどうして迎えに出てこないのか」と

聞くと、「あなたの娘はわたしと一緒にではない。2日だけ彼女と暮らしたが、それからとなりに住んでいる使用人、<雪を飛び越えるもの>のところへやった」といった。根女がそこへ行くと、娘の野生ライ女とその夫<雪を飛び越えるもの>はまだ眠っていた。根女は娘のお下げをひっぱって、家のなかから引きずり出して「おまえは馬鹿だ、いい夫をもっていたのに、引き留めておけなかった。うちへ帰ろう」といって、二人の女は歩いていった。

⑨ トナカイのところから川女がクイキニャークの家へいくと、むすめの草女が迎え出て、「エメムクトとわたしを結婚させにやったきた老夫婦は本当のクイキニャークとミチではなく、トナカイが人間の姿をしていたのです。クイキニャークとミチが空から戻ってきて、あのトナカイを犠牲にした。エメムクトは素敵になった。トナカイにのって帰って、父さんにわたしが豊かにくらしていると話してください」と云った。

川女は家で食事を与えられ、家へ帰るときにはクイキニャークが息子たちに「トナカイの群の半分を根男にやりなさい。わたしたちの群は大きすぎるし、牧童もたくさんいる。それに娘のチャナイナウトを根男の息子の嫁にやろう」といった。

⑩ 川女にトナカイの群を半分贈り、エメムクトは妻と妹のチャナイナウトを伴って根男のところへ出かけた。途中で根女と野生ライ女を追い越した。雪が深かったので、かの女たちは難儀して絶えず転んでいた。川女はそれを見ると、エメムクトに「橋に乗せてやりましょう」といったが、エメムクトは答えずにトナカイに鞭をやり、かの女たちを置き去りにした。

エメムクトが根男の家に近づくと、根女の小さな息子が出てきて、家のなかに向かって「母さんが霜男のトナカイで帰ってきた」と叫んだ。根男はすぐに出てきて妹を迎え、橋が止まったときに、「誰がきたのだ」と尋ねた。「わたしよ」と妻が答えた。「エメムクトと娘です。前にここへ来て、エメムクトに嫁をつれていったのは、クイキニャークのトナカイだった。本当のクイキニャークはトナカイの大きな群を連れて空から戻って来たばかりで、わたしたちに群の半分をくれ、娘のチャナイナウトをわたしたちの息子の嫁にくれました。」「妹はどこにいる」「彼女は娘と歩いて帰ってきます。エメムクトに乗せるようにといたのに、彼はトナカイに鞭を当てた」と川女は答えた。「そうか、歩いてかえってくるがいい」と根男はいった。

彼らは家にはいった。何頭かのトナカイを犠牲にした。根女と野生ライ女は日暮れには戻らず、そっと帰ってくると静かに炉の陰に座っていた。根女の息子が「母さん、わたしたちはいつトナカイを犠牲にするの」と聞くと、かの女は息子を叩いて「静かにしなさい」と云った。

しばらくすると、エメムクトは義父に「家へ帰ります」といい、彼らはみなクイキニャークの家へ戻ると、そこで仲良く暮らした。おしまい【話し手：カーメンスコエ村の海岸コリャク、1901年1月6日】。

天空へ旅行をするのにクイキニャークは家族とトナカイ橋を連れていく。途中でしんがりになっていた幼いエメムクトは後ろを振り返ったばかりに落下し、クイキニャークが遣わした2頭のトナカイが地上で人間夫婦に化して、子どもの養育に当たる。長じたエメムクトにトナカイ夫婦は根男の姪の野生ライ女を求めるが、貧しいために断られ、

根男の娘の草女と結婚する。クイキニャークが家族と天空から帰還し、問答のやりとりのあとにクイキニャークはエメムクトを自分の息子だと認め、頭を打つと、二つに割れ、なかから真のエメムクトが現れる。養育者のトナカイ夫婦はトナカイに戻り、至高神へ犠牲に捧げられる。

この後にはエメムクトと結婚した草女の母親川女に対して、霜男と結婚した野生ライ女の母親根女が嫌みを云うところからはじまり、後者の予想に反して、貧しいエメムクトはトナカイの大きな群を持つクイキニャークの家族であったことから、自分が惨めな思いをするという筋の話が展開する。

### 3. I-a-c) 滑稽譚

家族や一族のために食糧を調達確保することは家長の一大任務であるが、テナントムワンの場合と同様、これに関する話には常軌を逸脱した滑稽さがみられる。特に、食に対する食欲さはクイキニャークのトリクスター的な特徴の典型的なものである。

#### 9) 「クイキニャークのトナカイびと訪問」 [No. 65]

クイキニャークがいたころのことだ。息子たちは川上へ魚捕りにいった。クイキニャークは食糧がなくなったので、妻のミチに「靴を出してくれ、トナカイびとのキャンプへ行って、肉をもらってこよう」といった。服を着ると、トナカイを呼んだ。すると、クマ、オオカミ、野生トナカイなどあらゆる獣がやってきた。クイキニャークはそれぞれの鼻をたたいて、「おまえたちを呼んだのではない」と云ったので、みなは逃げていった。最後にハツカネズミがやってきたので、クイキニャークはそれらを大きな櫓につけてトナカイびとのキャンプへいった。彼らは「クイキニャークがハツカネズミを櫓に繋いでいる」と笑い、櫓に肉や脂やその他の食糧を積み、毛皮やテントを覆うトナカイの毛皮もせた。「さあ、走れるか」とトナカイびとは笑いながら云った。クイキニャークはハツカネズミに鞭をやり、飛びだした。トナカイびとはトナカイで追いかけたが、追いつけず、クイキニャークは家に帰ると、ハツカネズミを放した。

息子たちが帰ってくると、クイキニャークは自分の鼻を擦って血をだし、「わたしは死ぬ。だが、火葬にはしないで、空き家に置いて、魚卵や干し魚、肉や草の根をいろいろ供えてくれ」と云った。クイキニャークは自分が死んだと思わせた。息子たちは彼を空き家におき、いろいろな食べものを供えた。息子たちがいなくなると、クイキニャークは起きあがって、根や魚卵や脂をいっしょにして潰しはじめた。少しして、息子たちが帰ってきてみると、父親はプディングをつくっているのだから、彼らは母親にそのことを告げた。かの女は「ライチョウをもってきて」と云った。息子たちがそれをもつてくると、かの女はその羽をむしりとり、自分の乳房をつけ、「行って、脅しておやり」と云った。ライチョウはクイキニャークのいるところへ行って、鳴いた。クイキニャークは仰天して、梯子を上がって、妻のところへ走ってきた。(未完) [語り手: Kuel 村、海岸コリャクの女性、1901年3月]

次の2話はベーリング海沿岸の集落で採録された話で、登場するのはクイキニャークとキツネである。話のつくりは以ており、クイキニャークの行為を真似たキツネが失敗をするというもので、ここではキツネ女が愚者、滑稽者となっている。

10) 「クイキニヤークとキツネ」 [No. 119]

クイキニヤークがいたころのこと。家族の食糧が足りなくなったので、クイキニヤークは海へ漁にいった。釣り竿を投げて、小さなワモンアザラシを捕るが、「小さすぎるからいらぬ」といって、水の中へ返し、また 釣りはじめた。すぐにグランドアザラシがかかったが、「脂が少ないから、いらぬ」といって、釣り糸をまた投げると、セウチがかかったが、「やせすぎているからいらぬ」といって、海へ返した。それからキングサモンをとったが、「魚は嫌いだ」といって。その後クジラを捕ったが、「クジラの肉はうまくない」と云って海へ返し、海の主のこども\*を捕まえた。クイキニヤークはその腹にストローを差し込んで、そこから大量の髓をとり、それを束にすると、家へもって帰った。

隣の家に住んでいるキツネが「うちの子どもたちも同じようにお腹をすかせている。どうしたのか教えてくださいませんか。どこでそれを捕ってきたのですか」 「氷の穴だ」 キツネはそこへ行って、釣りはじめ、小さなアザラシを捕った。「こりゃ、ごちそうだ。捕ろうかな」といって、それを水へ投げ返し、つぎにはグランドアザラシをとった。「こりゃ、よく肥えたアザラシだ。これで子どもたちを満足させられないかな」といって、また海へ返した。セウチを捕ると、「おや、何て大きいのだろう。うちの子どもたちにはたつぷりだ」といって、同じように返した。それから、クジラを捕まえた。「クジラの肉はとてもおいしい」といって、それも水へ返した。とうとう小さな男の子を捕まえ、その腹に指をつっこんだが、ほんのわずかな髓しか取れなかった。男の子はたいへんやせていたのだ。キツネは髓を家へもって帰った。

クイキニヤークは櫓に薄い氷をどっさり積んで家へ曳いていった。途中で振り返らなかったが、家へ着いてみると櫓にはとてもうまいクジラの肉がいっぱいのっていた。ミチはクイキニヤークを迎えに出た、たいへん喜んだ。キツネが「おやあ、教えてくださいよ。うちの子どもたちも腹を空かせているのです。どこで捕ってきたのですか」と云った。「氷の原っぱだ」 キツネは海辺へいった。「薄い氷は欲しくない。厚い塊の方がいい」といって、櫓に氷の塊をどっさり積んで、家へ帰った。途中、振り返ってみたが、氷は肉に変らず、元のままだった。それでキツネは息子にクイキニヤークのところへ行って一食分の肉をもらってくるように云った。キツネの息子がいくと、クイキニヤークは溝にいて、自分の肉を蒸していた。その子どもたちは空腹で泣いていた。クイキニヤークは溝から出てきた。すると4頭のクマの肉がすっかりできあがって食べるばかりになっていた。

キツネの子どもは帰ってきて、「クイキニヤークは肉を蒸していて、それがクマの脂になっていた」と云った。キツネは「早く、溝を掘っておくれ」といって。キツネは溝に座り、自分の体の周囲に炭を焚いて、そして焼け死んだ [チリラン村で採録]。

\* Sea-Master's child=不詳

11) 「クイキニヤークは如何にして川を造ったか」 [No. 125]

クイキニヤークがいたころのこと。食べ物が足りなかつたので、クイキニヤークは川を造って、それを自分の家のなかを通した。それから長い釣り竿で釣りをしたがはじめは何も釣れず、自分の影を



釣った。二度目には自分の右肩の肉をひっかいたので、釣りをにつづけることができなくなった。キツネ女がやってきて、手伝ったが、一度に2、3匹捕ろうとしたので魚が驚いて逃げるばかりだった。

しばらくすると、クイキニヤークは傷が治った。「いけ、何も良いことはなかった。わたしは海辺へアザラシを探しにいく」と云った。そこにワモンアザラシがいたので、一番小さいのを捕まえ、家へもってきて食べた。しばらくして、すっかり食べてしまったときに、キツネ女がまたやってきた。

「わたしも行って、腕試しをしよう」「行くな。おまえには運がない。釣りをだめにするだけだ」

キツネ女は海辺を歩き、アザラシを見つけると、一番おおきいのを捕ったが、肩に担ぐことができなかった。アザラシは「手伝ってあげよう」といって、自分でキツネの背中にのった。アザラシはとても重かったので、キツネは転んで滑って川に落ちた。泳ごうとして、自分の足に「櫂のように動け」といい、尻尾には櫂のように動くように命じたが、ただ、岸に向かって動くようにいい忘れたので、海の真ん中へ進んでいった。キツネ女は疲れて漕げなくなり、ようやく、尻尾に岸に向かうように云った。陸にあがると、キツネ女は着物を脱いで、それを石のうえに広げて乾かした。それから眠くなったので、目玉を取り外し、「わたしを見張っていなさい。誰かきたら、腋の下かお腹をくすぐって起こしておくれ」と云った。少しすると、潮が満ちてきたので、目玉はすぐにキツネ女をくすぐったが、起こすことはできなかった。波はキツネ女を持ち上げて、沖へさらっていった。着物も目玉もなかったのか、かの女は寒さと疲れで死にそうだった。ようやく、尻尾が海辺に向かって櫂をとったので、陸にあがり、目玉をみつけると、「どうして、見張っていなかったのか」といって石で叩きつぶした。それから、他の目玉を探しにいった。コケモモを2粒摘んで、試したが、とても暗かった。それで小さな固雪をはめてみたが、涙が頬を伝って流れた。「泣きすぎだわ、でも明るくはなった」といって、家へ帰った。

その間にテナントムワン\*は雄トナカイに変じて、オオカミに自分を殺させようとした。オオカミはトナカイを食べ、骨だけが残った。キツネ女はその骨を見つけて、ぜんぶを食べてしまうと男になった。歩いていくと山岳羊の遺骸があったので、それを家へもって帰り、料理をした。クイキニヤークの妻のミチがちよっとの間外へ行っている間に、キツネ女は釜を蹴飛ばしてひっくりかえし、傷つけ、ミチの肉切りナイフを折って火のなかまに捨てた。肉は生き返り、外へ出て行った。ミチはそれを見ると、「料理するにちょうどいい肉が釜一杯ほどもいく。ああ、わたしの釜の肉だわ」と云った。

ミチはキツネ女を追い出した。かの女が海辺へいくと、カモメが水の上に漂っている丸太にとまっていた。キツネ女「何をしているの」「魚を捕っている」「その舟に乗せて」「飛び乗りなさい」キツネ女が丸太の飛び乗ると、丸太は沖へ流れだした。カモメが一斉に飛び立ったので、丸太はひっくり返り、キツネ女は水に落ち、沖へ流されて溺れてしまった「オプカ村で採録」。

\*ここにあるテナントムワンはあるいは語り手の誤りではなからうか。いかにも唐突である。

#### まとめ

「クイキニヤークがいたときのことだ」という語り口をもつ説話はコリャクでは11話ある。地域的な分布は上述の通りであるが、煩瑣を厭わず繰り返すなら、1)タイゴノス半島のトナカイコリャク：2話、2)ペンシナ湾西岸

の海岸コリャク：1話、4)上ペンシナ湾岸の海岸の海岸コリャク：5話、5)ペンシナ湾東岸の海岸コリャク：1話、6)ベーリング海沿岸：2話である。

このうち、クイキニャークが主人公となる説話は、「<宇宙>は如何にして雨をつくるか」という話で、このなかではクイキニャークは息子のエメムクトとワタリガラスのコートを羽織って天へ至り、長雨を中止するという正に文化英雄的な所業をおこなう。そして、この説話は雨や吹雪を中止するために語られる呪術性の強い神話であるといえよう。海上の嵐の原因が沖の女神であるとする「カイツブリ男」の説話も同じような観念を背景にしているようであるが、ここではエメムクトとの婚姻が原因解消になっている。また、病気の原因がカマクであるとする観念はクイキニャークの説話だけでなく、テナントムワンについても語られるから、この観念こそは広くコリャクに共通するものと見てよかろう。あらゆる場面で婚姻が頻繁に語られることも全体として大きな特徴であるが、特に、クイキニャークの家族のエピソードのなかで顕著に見られ、また、結末では常に夫方と妻方双方向の訪問が語られ、同時に双方の兄弟姉妹の結婚が付加されるのは注目しておいてよかろう。

また、クイキニャークの家族のエピソードがかなり長い説話になっていることも興味深い点で、いくつか英雄説話に共通する特徴が認められる。さらに、多少とも滑稽味を帯び、トリクスターの登場する説話はタイゴノス半島やベーリング海沿岸に見られ、ペンシナ湾地域には顕著でないことも指摘できよう。

全体として、今の時点で確認できることは、まず、クイキニャークを主体とする説話 I-b) が海岸コリャクに偏っており、テナントムワンの説話 I-a) がタイゴノス半島のトナカイコリャクにもつばら集中していることと対照的なことである。そして、クイキニャークについて云えば、I-b) の11話のなかで、クイキニャークがワタリガラスとなるのは1話だけであり、他の場合にはワタリガラスの影は全く認められない。このことについては別の語り口の説話を検討しなければならない。

## 文献

Bogoraz, Waldemar

1903 The Folklore of Northeastern Asia, as compared with that of Northwestern America, *American Anthropologist*,  
*New Series*, Vol.4, No.4, 577-683

1904-1909 *The Chukchee, The Jesup North Pacific Expedition, Memoir of the American Museum of Natural History*,  
Vol.VII, Leiden-New York

1910 Chukchee Mythology, *The Jesup North Pacific Expedition, Memoir of the American Museum of Natural History*,  
Vol.VIII, Leiden-New York

Charin, Anne-Victoire

1983 *Le petit monde du Grand Corbeau, Recits du Grand Nord siberien*, puf

Chowning, Ann

1962 Raven Myths in Northwestern North America and Northeastern Asia, *Arctic Anthropology*, Vol.1, No.1, 1-5

Jochelson, Waldemar

1909 *The Koryak, The Jesup North Pacific Expedition, Memoir of the American Museum of Natural History*, Vol.VI, Leiden-New York

1927 *The Yukaghir and the Yukaghirized Tungus, The Jesup North Pacific Expedition, Memoir of the American Museum of Natural History*, Vol.IX. Leiden-New York

Worth, D.

1961 *Kamchadal Texts collected by Jochelson, Mouton*

Ворограз, В.Г.

1900 Материалы по изучению чукотского языка и фольклора, собранные в кюлымском округе В.Г.Ворогразом,

Труды Якутской Экспедиции, снаряженной на средства И.М.Сибирякова, Отдел III. Том X. Часть III, СПб

1926 Миф об умирающем и воскресающем звере, Художественный фольклор, №1

1936 "Основные типы фольклора северной Евразии и Северной Америки", Советский Фольклор, № 4-5

Володин, А.П.

1974 Ительменский язык, АН Институт языкознания, Лен.отделение

Мелетинский, Е.М.

1974 Поэтика мифа, Институт мировой литературы им.А.М. Горького. Москва

1979 Палеоазиатский мифологический эпос - цикл ворона, Главная редакция восточной литературы. Москва

Меновщиков, Г.А.

1975 Сказки и мифы народов Чукотки и Камчатки, Главная редакция восточной литературы. Москва  
Стебницкий, С.Н.(未見)

1941 Корякский исторический фольклор и зарождающаяся литература(рукопись)

2000 Очерк этнографии коряков, Санкт-Петербург

荻原眞子

1990 「北東パレオアジア諸族の創世神話-その問題点-」(小谷凱宣編)『北方諸文化に関する比較研究』(名古屋大学教養部)、105-121

1995 『北東アジアの神話・伝説』、東方書店

(おぎはら しんこ・千葉大学文学部)